

令和5年度 刈谷市 共存・協働のまちづくり推進委員会

第1回まちづくり部会 記録

日時：令和5年8月23日（水）
午後2時00分～3時20分
場所：刈谷市役所 402会議室

出席者

団体名・役職等	氏名
刈谷市民ボランティア活動センター センター長	米田 正寛
刈谷市自治連合会	大野 裕史
一般社団法人まちづくり支援センター 代表理事	塚本 裕章
文化工房かりや 代表	久保田 富士子
一般公募	岡 由香
一般公募	水鳥 幸子
市民活動部長	近藤 和弘

欠席者

刈谷市小中学校長会	細川 圭子
-----------	-------

事務局

所属	補職名	氏名
市民活動部市民協働課	協働推進監兼市民協働課長	渡部 貴美子
市民活動部市民協働課	課長補佐兼協働推進係長	小原 崇照
市民活動部市民協働課	主事	内藤 佑佳
市民活動部市民協働課	主事	前川 和奏
NPO法人ボランティアネイバース	副理事長・調査研究部長	三島 知斗世
NPO法人ボランティアネイバース	理事・事務局長	遠山 涼子
NPO法人ボランティアネイバース	事務局スタッフ	加古 麻理江

1 開会・あいさつ

- ・定刻になり、協働推進監兼市民協働課長が開会を宣した後、資料確認を行った。（略）

2 議題

(1)まちづくりコーディネーターの活動状況について

■【資料1-1～1-3】を提示し、まちづくりコーディネーター（以下、まちコ）について事務局が説明

（まちコの活動報告）

- ・まちコ12名を4件の事業に派遣（依頼元：自治会、市民協働課など）。事前打合せを含め、計7回の派遣を行った。

（まちコゼミ）

- ・大野ゼミ4回、塚本ゼミ3回開催。まちコ自身が学びたいテーマを選び参加する。

▼大野ゼミについて、大野委員より紹介

- 「地域の課題を解決する手法を知りたい」と小山地区から依頼があり、マンガラートを用いた勉強会を開催したことをきっかけに、まちコ自身が課題解決の手法を学ぶことをテーマに開催した。小山地区では、子ども会、婦人部、地区委員等、複数回に分けて延べ100名程が受講しており、素晴らしい取り組みである。
- ゼミでは、マンガラートを用いて要因を分析し、対策案を作り、Todoリストとして手順に落とし込むまでを5回に分けて実施し、7月をもってこのテーマを終了した。
- 将来的にまちコ自身で講座を実施できるよう、資料やマニュアル作成を進め、まちコ・ルーム（まちコ専用ウェブサイト）に資料を掲載した。自由に活用していただきたい。

▼塚本ゼミについて、塚本委員より紹介

- 毎回1名のまちコがゲストとして、まちづくりに限らず、好きなことや取り組んでいること等の話をする。日ごろの活動を知ることで、まちコ同士の交流を深め、お互いの活動にプラスの効果となる他、発表者には自信につなげてほしいと考えている。

（まちコ交流会）

- 【第1回】9月16日（土）15時～17時 会場：刈谷市民ボランティア活動センター
- まちコ有志による「マンガラート・Todoリストの活用ミニ講座」「まちコカフェ体験会」の開催等。
- 【第2回】令和6年2～3月頃「まちコ活動収穫祭」を予定。

（つなぎの学び舎）

- これまでまちコ登録のしくみは、隔年開催する基礎編・実践編のいずれも修了した方を対象としていたが、コロナ禍で開催スケジュールが延期されたことにより、登録まで2年以上要する事例が生じた。
- 今年度より、基礎編と実践編の内容を統合・再編成し、1年間の受講でまちコに登録できるしくみとした。
- 7月～2月の間、全7回講座。13名が受講。

■質問・意見交換

【学び舎プログラムについて】

委員：1年間のプログラムとなったことは初めて知った。今後も同様に実施される予定か。

事務局：コロナ禍で開催を延期したことでプログラムの時期にずれが生じ、実践編を先に受講した参加者が基礎編の開催を待つ事態が生じた。そこで、1年間の受講でまちコに登録できるプログラムに変更した。やる気のある方の熱が冷めないうちに受講・活動につなげることを重視した。同時に、まちコ登録者の現場での活動をフォローするための講座の開催を検討しており、新たな学びの内容を加える他、まちコだけでなく一般の方にも参加いただけるような機会を考えている。

委員：そのような機会にはぜひ参加したい。

【まちコカフェの取組について】

委員：カフェのようなオープンな雰囲気でお話をする機会をまちコが設けることについて、まちコ交流会企画会議で集まった際に米田さんから提案された。市民ボランティア活動センター（以下、ボラセン）に団体登録して場所を提供いただく。9月のまちコ交流会にて試行的に開催する予定である。

部会長：まちコだけでなく一般の方も自由に話ができたり、困り事を相談したり、ざっくばらんに話す雰囲気でも楽しく取り組んでいただきたい。ボラセンの交流スペースは予約不要で、多くの市民の利用につながるような有効活用はセンターとしてもありがたく、共催事業のように一緒に取り組めるとよい。初期段階でコーヒーやお菓子代が必要な場合は支援したいと考えている。

(2) 共存・協働による地域活動の活性化に向けた検討

■【資料2】を提示し、協議事項について事務局が説明

(資料2/共存・協働による地域活動の活性化に向けた検討)

- 共存・協働によって、各自治会等で取り組まれるとよいこと、課題が具体化されている地域をモデルとした取組の検討を本部会における協議の方針とする。
- モデルの候補として、元気な地域応援交付金、まちコの派遣活動等で課題解決の方策検討に取り組む3地区の実践を基に意見交換を行い、2年間にわたり部会で検討するテーマを選定する。

■質問・意見交換

【自治会加入率について】

委員：各自治会での転入者への加入案内はどのような流れか。

事務局：地区により対応は様々である。基本の流れは、市役所から転入者に対して基本的な情報を提供する。

例えばごみ捨てに関しては、捨て方の情報は市役所から伝え、ごみ捨て場は班長等に確認をしてもらう。東刈谷では、転入者を班長が訪問して指定回収袋(麻袋)を届けていると聞く。

委員：ごみ捨て場を確認する際に、地域の方と話ができる。手厚いフォローがある地区もあれば、人手不足により手が回らない地区もあり、相対的に加入率に影響している可能性があるかと理解した。

委員：市内の転居の際は、組長や班長が新築の家を見つけたら対応している。集合住宅の場合は察知しにくい、年に1度4月に行う世帯数調査で把握して対応している。

部会長：自身の班の場合、転入者が班長等にあいさつをしたり、地区内で住宅地図を共有したりして把握している。組費の徴収は年度途中の場合月割りで徴収しており、組への加入と同時に自治会費用も納める。必然的に転入者は100%加入となる。

委員：組への加入と同時に強制的に自治会へ加入しているということか。

部会長：自治会費を集めにきたことを説明して、気持ちよく入ってもらっている。

委員：自身の自治会も状況は同じである。班単位で年1回会合があり、転入者を皆へ紹介する機会を設けている。

【地区委員向けの加入案内の定型化について】

部会長：千葉県柏市では「加入促進ハンドブック」を用意しており、加入を働きかけるときの心得やよくある質問への対応、対応事例等がまとめられている。柏市ウェブサイトからダウンロードできるので、参考にしたい。

事務局：刈谷市においては加入を促すちらしを作成している。

委員：自治会加入の意味について、言葉だけで説明することは難しい。紙に書かれたものを自治会長や班長から手渡しすれば、家庭で話し合うきっかけになる。配るだけなら協力できる世帯もあるかもしれない。協力できることが提案されてくると、包括的な取り組みとなり、まちづくりにおいて地区の連携が大事だという認識が広がることにつながる。そうした動きにまちコも関わるとよい。

【役員の成り手不足の課題について】

部会長：子ども会が相次いで消滅している。子どもの数が多くて自治会の加入率が高く、昔ながらの人が多い地区でも子ども会の消滅が起きている理由としては、役員が大変という点がある。その背景には定年延長があり、親世代・祖父母世代でも働いている人は多く、休日に働いている人もいる。他方、市子連には入らない形で新たに活動を始め、ボラセンに登録する子ども会も出てきている。

委員：「仕事が忙しくて役員にはなれない」と言われるとそれ以上返す言葉がない。子ども会の減少問題はその点にも課題があるのではないかと。

委員：また、仕事だけでなく子どもの習い事等でも時間が取られ、地域と関わる時間が多く取れない人とも、何かあったときは助け合いたい。そのためにはつながっているかどうか重要である。仕事が忙しい人は、定年後家に戻ったときに地区とのつながりがないと、孤独を感じる。高齢者のお手伝いをしてはいるが、特に独居の方においては社会問題ともなる。

子ども会や自治会に加入していなくても、連絡をとれたり、困ったときにSOSが出せたり、できる時間内でお手伝いをしたり、気づいたときに家の周りを掃除したり等、負担がない範囲でつながりができる地区づくりができないか。子ども会や自治会がある地区は、形を変えて取り組むことで、輪を広げながら取り組むことができる。月1回の会合に出ることは負担でも、つながりづくりにむけて取り組もうと違う形で呼びかけることで、加入につながるかもしれない。そうした緩やかで負担が少ないつながりづくりを、自治会連合会へ組み込んでいき、全地区で広げていく。まちコが関わりながら、少しずつ文化として積み上げていけるとよい。

委員：元刈谷地区の盆踊りにスタッフとして携わった。700~800人の親子が参加しており、学校にチラシを配ることで多くの参加につながった。お年寄りの参加が少なかったのはいきいきクラブへチラシを配らなかったためと聞いた。子ども会に入っていないなくても、親子に情報が行き届いて参加してもらえたことから、加入していなくても地域の交流につながればよい。できれば入ってほしいが、いろいろな考えがあるため強制はできない。

【つながりの可視化について】

部会長：つながりは見えない。一人暮らしの高齢者が、地域の中にどのようなつながりがあるかは分からない。

委員：自分はおすそ分けや声かけをするなど、自らつながることを意識しているが、隣の人はどうされているかは見えない。

部会長：いきいきクラブの加入率は17%、子ども会、自治会の加入率も少ないところは半数以下。取り残されている人がうまれないよう、つながりを見える化することが必要ではないか。

目の前の人を知らなくても、輪が重なり合うように、長い鎖のどこかで誰かとつながっていればよい。子ども会、自治会などはつながりを見える化する手段の一つである。自治会加入率の数字では、本当のつながりがあるかは分からない。いろいろな地区でのつながりを比較して、判断する必要がある。地域には経緯、習わし、習慣がある。地域に関わる際は、地域の慣習を大事に、理解を示して取り組むことが必要である。解決するのは現場であり、自分たちでやる気になって取り組まなければいけない。そこにまちコはどのように関わっていけるか。

委員：自治会は地べた、市民活動団体は興味関心によってつながりをつくる。共通項が異なるが、つながりをつくる点は一緒。強制的な加入は必要がなく、その人が好きな趣味の会に入っていたらそこでつながりがあると言える。地区長が全部のつながりを把握していなくても、誰と誰がつながっているということを知っていれば、それぞれがばらばらであってもつながりがあると言える。つながりが見えるようにすることは必要か。

部会長：把握できている人はよい。人口の多い地区でのつながりの可視化は難しい。100戸以下の単位であれば、比較的取り組みやすい。また、一人暮らしの高齢者は、人のつながりや、趣味の団体への参加などによって地域の情報を多く持っている。小さな単位から分かる範囲で取り組みればよい。見える化することは一つの手段であり、それに限らず検討したい。

【小さな単位のつながりを把握することについて】

委員：地域活動が活性化している状況には、つながりが見えていることが必要か。

部会長：つながりが見えたから活性化しているとは一概に言えない。

委員：今より10人多く声をかけたら地域が活性化した状況になるが、つながりが見えるようにはなっていない。つながること自体が活性化の基となるのであり、つながるにはどうしたらいいかという点を議論しなければいけない。「加入促進ハンドブック」はつながりを促進するためのツールの一つである。防災について考える際に、何人の人を助けに行けるか具体的に名前を挙げてもらった後で、何人の人から助けに来てもらえるかと問うと、なかなか挙がらない。それもつながりの一つであり、みんなで確認してみるとよい。

部会長：6千世帯もある地域、農地や店舗が多い地域、高齢者が多い地域、昔ながらの人が多く住んでいる地域、それぞれ地区によって異なる。つながりが見えることが煩わしい人もいる。そこにいる人たちが

どうとらえるか、まず地区の人に聞いて進めることからではないか。

委員：100%つながるのが理想であるが、20%でもつながれたら何もやらないよりはよい。若い世帯や新興住宅の方と話をしてみたい。子どもに関しては学校で把握するリストでつながりがあることは確認できるが、市民協働課の管轄として把握できることがよい。教育委員会との連携で子どもと関わったり、長寿課と連携したりすることで、民生委員も含めて地区の独居の方のことがわかる。リストにあってもつながりがあるか、コミュニケーションが取れているかどうかは別の問題である。

つながりをテーマに、これから議論をしていきたい。話し合いを小さな単位からヒアリングを兼ねて行う。開催する曜日や地区を多様にし、参加しやすい場を設ける。各地区のモーニングの場所やゲートボール会場などでちょっと話をする機会を設けて、その声をまとめて、見出された共通項を施策としたら、市の財産となり、先進事例にもなる。

市民協働におけるつながりをテーマとしてまちコや自治連へ展開していくために、多様な人や場所で声を上げていくためには、様々な単位で議論していくことが重要だ。

事務局：高浜市「健康自生地」の取組では、公園で体操している方の集まりや、喫茶店に集まっている仲間がいるという情報を全市的に集めて、様々なコミュニティの情報がウェブサイトに掲載されている。参考になるかもしれない。

【あいさつプラスαの取組について】

委員：自治会役員を始めたころに、あいさつをすること、そして次の一言を言いなさいと教わった。「こんにちは、今日はあったかいね」とすると話が始まり、それによりつながりがうまれる。あいさつプラスαの運動をしていくこと。つながりの声かけを運動として展開していく必要がある。

委員：あいさつプラスαを全市民が心がけましようとするのはシンプルだが威力がある。泉田地区の住民会議や高齢者サロンで話を聞くと、連携がとれていると感じる地区は中学校のボランティア参加率も高い。自治会のみなさんが見守りながら、下校時の対応ルールに基づいて誰でも必ずあいさつをしようと、あいさつと一言をかわす運動として展開できれば広がりか期待できる。地域に展開するにはシンプルなくみに落としこめることが重要である。

委員：西部地区の前公民館長は、朝のパトロールで子ども見守り中に、名前を呼んで声をかけており、目指したい姿である。

【地区活動の把握について】

委員：全体会でも話題があったスポーツ推進委員などの活動は大事であり、地区の情報を把握することが大事である。つながりをテーマとした取組みの、意識を広げるキャンペーンをとれるとよい。

団体のヒアリングにきちんと取り組み、数、対象の把握、洗い出しを第一段階として取り組むとよい。ボラセンに登録している団体の中にもいろいろな地区の方がいる。登録団体へのヒアリング項目の検討も含めて、まちコが関わりをもって取り組んでいけるとよい。

部会長：あいさつからつながりができたら、声をかけあって行事に参加したり、自然に自治会に参加したりできる。参加して楽しかったら、他の人も誘って参加するかもしれない。身近にできることから始めて深めることで、結果的に自治会に入る人が増えたり、行事に参加したりする人が増えたりすればよい。小山地区は規模が大きく、組などの小さな単位がモデル地区として想定される。こういった情報の流し方がよいか、どういう声かけがよいか、どんな結果が生まれるかの情報収集から始める。

委員：人の集まる情報を集めて、ICTを活かしてつながりを表してみたら、ほとんどがつながっているのではないか。これからの取組にはスマホなどのICTツールを活かすことでできるのではないだろうか。どうやったら声かけ運動ができるか、このテーマの取組は歴史が長いように思う。

部会長：モデルが明確になってそれに取り組む際は、地域の役員が主体的に取り組むことが前提である。役員は変わるため、取組みを理解していただき、役員から役員へつないでいくことも大事である。小学校など教育機関と一緒に取り組めるとよい。

委員：町内で歩いていて、自分からではなく相手から先に挨拶をされるとちょっと悔しい。そうした気持ち

に皆がなるようになればよい。

【地区とまちコが関わるきっかけづくりについて】

委員：地域とまちコの間わりは住民会議が主であった。小山地区での勉強会という新たな取り組みはどのように生まれたか。

事務局：昨年度自治会長と公民館長 50 名程を対象とした講習会で守随さんに講演をいただき、まちコの実践が紹介された。それをきっかけに小山地区から依頼を受けた。

委員：地区長・公民館長が 23 地区から 2 名ずつ、50 名弱が集う場。西部地区のお宝さがしウォーキングもまちコに手伝ってもらっている。受け入れ地区を探すことが、つながりづくりに必要である。

委員：地域に密着したまちづくりコーディネーターの活動が必要であり、役に立てると考えている。新たな依頼に興味があるし、そのような依頼が広がるとよい。

部会長：地区長へのアンケートによると、まちコはあまり知られていない。また、まちコへのヒアリング結果によると、まちコも地区に入りづらい状況にあった。地域が主体で行う取り組みに、まちコが関わりながら地区を活性化していくことはまちコのあり方として理想的な活動である。

取り組みを進めていく上では失敗してもよい。次につながるような試みがよい肥やしになる。そうしたことができる、実践につなげられる地区を選んでいただけるとよい。

委員：まちコに登録した際、地区長にあいさつにいき、活動のお役に立てたらと話した。しかし、地区長が 2 年で交代すると情報が途絶えてしまった。地域との情報のやりとりを継続していけるようなしくみづくりにも取り組みたい。また、活動の伴走支援の機会としてどんなものがあるか、模索していきたい。

委員：地区長の集まりの際に、まちコのメンバーが紹介されているか。

事務局：個人名の紹介は控えているが、地域のまちコの数を紹介している。

部会長：地区長とまちコの懇親会をしたら雰囲気が変わるのではないか。両者の距離を縮める最初の一步が難しいので、きっかけとなる場を用意して背中を押してもらえるとよい。

【モデル地域の選定について】

事務局：小山地区での勉強会は継続中である。他の地区からも声がかかる可能性がある。

部会長：現地で見学会をするなど、実際に取り組んでいる人たちから直接聞き取っていくとよい。

事務局：つながりが一つのテーマとなった。まちコの方々がどのように関わるかについて事務局で検討したい。今後は住民会議だけでなく、自治会の困りごとにまちコが第三者の立場でファシリテーションをする中で対応できるケースも増えていくのではないかと。

部会長：つながりがあれば、いろんな情報が届いたり、声をかけたりできる。ではどうやってつながりをつくるかは地区によって異なるので、小さな単位から考えていきたい、という議論ができた。

事務局：地域の課題は、短期間で解決するものではなく、根深い課題である。少しでも加入率の低下を食い止められるよう、長く継続して取り組んでいきたい。

部会長：地区の人が主体的に動くことが大原則。土足で踏み込んであれこれいうと、何を言っているんだと受け止められてしまいかねない。地区の方たちにしっかり考えていただき、地区の方が自分ごととして考えていけるよう取り組みたい。まちコの手柄ではなく地域の手柄として、地域のみんなで取り組んだ成果を生み出すため、まちコが影で支える役割として関われる形を考えていきたいと思います。

(3) 今後の予定

■まちづくり部会

第2回 令和6年1月22日(月) 14時30分～16時00分 刈谷市役所604会議室

以上